

メッセージアウトライン ローマ 6 : 15~23 「奴隷のたとえ」

[15] 「それではどうなのでしょう。私たちは、律法の下にではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、ということになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。」パウロは6:1と同様に自ら疑問を示し、それに答えるというかたちで信仰者のあるべき姿を教えていく。ここでは、信仰者は律法の下にではなく恵みの下にある。神は罪を恵みによって赦してくださるのだから、罪を犯してもよいのではないか。という問いである。しかしパウロは断固としてこの考えに反対する。

[16] 「あなたがたはこのことを知らないのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至るのです。」

「奴隷として服従する」とは全面的服従を意味する。自分自身を積極的に罪にささげて服従していけば最後には死に至り、永遠の滅びとなる。しかし、信仰の従順によって積極的に神に従う者は神の奴隷となり義に至るのである。それゆえ、神にも仕え、罪にも仕えるという二股をかけることはできない。神か罪かどちらかである。

[17-18] 「神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えられた教えの基準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。」

「伝えられた教えの基準」とは福音の示す信仰基準のこと。信仰者は感謝なことに、この福音に示されている信仰基準を受け入れ、心から服従し、罪の奴隷ではなく義の奴隷とされている者なのである。

[19] 「あなたがたにある肉の弱さのために、私は人間的な言い方をしています。あなたがたは、以前は自分の手足を汚れと不法の奴隷としてささげて、不法に進みましたが、今は、その手足を義の奴隷としてささげて、聖潔に進みなさい。」

「肉の弱さ」とは靈的理解力の弱さのこと。それゆえパウロは人間的な奴隷の例をもって説明し、自らを不法の奴隷ではなく、義の奴隷としてささげて聖潔に進むように命じるのである。信仰者は救い主イエスを信じた時に与えられた御霊により頼んでいく時に御霊の実を結び聖潔に進むことができる。→ガラテヤ5:16~18、22~23

[20-22] 「罪の奴隷であった時は、あなたがたは義については、自由にふるまっていました。その当時、今ではあなたがたが恥じているそのようなものから、何か良い実を得たのでしょうか。それらのものの行き着く所は死です。しかし今は、罪から解放されて神の奴隷となり、聖潔に至る実を得たのです。その行き着く所は永遠のいのちです。」

生まれながらの肉の性質に従い生きる時、それに見合った実を結ぶ。→ガラテヤ5:19~21
それは神のさばき、死、滅びに行き着く。しかし罪から解放され神の奴隷となった者は聖潔に至る実を結び、永遠のいのちに至る。

[23] 「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主イエス・キリストにある永遠のいのちです。」

これがパウロの結論であり、また厳然たる事実なのである。